

平成二十八年四月一日発行 第二十六卷第四号 通巻第二九八号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

平成28年4月号

岡井省二創刊



大丈夫

高橋将夫

一山凍てて全天の星凍つる
襟巻となつて狐の遊山かな
湯豆腐や傘寿卒寿と夢のまに
まだ芯に冷たさ残る湯豆腐よ



存在の証の炭や雪達磨
吾を見て目を丸くする雪達磨
おほかたの風邪は鼻から入り込む
冬帝をはばむがごとく槍穂高
冬霧を漉して絹漉し豆腐かな
信念は石より固し寒卵
大丈夫冬の灯が見えてをる



槐安集

水野恒彦

寒明けの能面の眉つと開く
余寒なほ生きとし生けるものの影
たまゆらの熱き命に鶴の舞
春暁の藪の伐られてゐたりけり
鯨塚沖に向きゐて冴返る

加藤みき

やらなければやられてしまふ猫の恋
宮裏にふくら雀の番かな
寒満月地下鉄車輛地に並び
沈みゆく抹香鯨に敬礼す
藪巻のゆるびてゐたり気の湿り



中島陽華

幻月や馬込人參撫でながら
湯豆腐の湯気忘れじの蔵王かな
山伏の定宿冬至南瓜出て
天満橋名店街の寒雀
穴ふたつかるう押へて笛初め

竹内悦子

女湯に小さなふぐり除夜の鐘
松に来て松をはなるる初鴉
めでたさの壺湯となりし二日かな
福笹を提げて京阪電車かな
和三盆梅一輪と掛軸と

雨村敏子

近藤喜子

元朝の高野参道杉木立

凍鶴の身じろぐ熱き血の流れ

朝日影破魔矢持ちたる子どもにも

遠き世にひざまづきたる若菜摘み

御降りや空也の口も鴉にも

海光を山に引き込み寒椿

赤ん坊の蹠ぶくぶく福寿草

群れゐても個々の宇宙を寒鴉

御形てふゆかしき名前粥噴ける

寒月に亀裂の高音トランペット

本多俊子

瀬川公馨

水天は蒼を深めて子日草

年頭白書そこのけ猿の遠眼鏡

めぐり合ふ不思議天狼透き通る

驥に跨りて駆けに駆けたり冬銀河

鯉の鱗しなやかにして七日かな

年神や霞を喰ふて生きるべし

葉牡丹の渦や未来の風匂ふ

明けの春つやつや知らぬ世界あり

颯に触るる実生の冬もみじ

寒雷に打ちのめされてみたりけり

久保東海司

いくさなき平和を好む初詣
神前の風の囁き年新た
平野部にゆき渡る雪山頂も
牡蠣すする余生漸く安泰に
獅子頭取ると馴染みの酒屋かな

柳川 晋

福笹の値の区まち区まちに豊かさよ
寒やいと臍の両脇二寸外
一文字の九条といふも平和かな
還曆を越え碧梧桐忌も越えてゆく
手毬唄姫は栄えて滅びける

熊川暁子

宝船が運休すると言ふ話
初神楽身丈に余まる鈴の紐
どんど火に灰まみれなる塞の神
冬の滝昼の暗さに懸りをり
雪野ゆく男女の距離のちぢまりぬ

寺田すず江

冬薔薇過去も未来も消して今
残り火の炎を上げし歌留多かな
胸中を見すかされたり冬の月
追憶が追ひかけてくる霜夜かな
母を待つ手鞠の音や寒茜

岩下芳子

どこまでも歩いて行かむ春の靴
ロボットの生真面目に掃く春挨
湯豆腐や真四角に切る理系女子
なだれ打つ水仙の色海に入る
凍瀧や天の半分支へたる

近藤紀子

どんな日がわたしを待つか初暦
日脚伸ぶ橋渡る子の歩巾かな
頬被り似合ふ男の河原町
如月は硬質の音多きかな
訃報聞くや水仙の花濃く匂ふ

岩月優美子

霜柱踏めば童女の顔となり
寒牡丹囲はれし身の美しき
ビオロンの響き寒星降り注ぐ
狐火やチェロの響きの途切れたる
鯉の色水面に浮かぶ四温光

竹中一花

初晴の鈴鳴り通す社かな
大根の椀に盛りたる熱さかな
春待つや泥を吐きたる銀の鯉
寒餅の五色がゆるる軒端かな
探しをる野草葉草雪の下

槐市集

有松洋子

心いま在るはあの風高^カ空の
雪雲が山に太き根張つてゐる
湯豆腐や遠く聞こえるシューベルト
町枯れてどの小径にも風が吹く
病床にさなぎとなりて春を待つ

犬塚李里子

喰積や空渡る風高らかに
白きもの身に纏ひつつうつた姫
冴返る晴のち雨の生に似て
マスクして安堵してをり人の中
嗶れし声を一途に初鴉

井上静子

臘梅の色に誘はれ万歩計
生れてより気品ただよふ水仙花
客人の好物のぶり大根
節分の鬼も高齢逃げ遅れ
母子草てふ名に遠き思ひある

今井充子

神佛を拝む人みな淑気あり
床の間の世を見渡せり鏡餅
足弱と共に歩みし去年今年
年新た重箱抱へ嫁来たる
初夢や慌てふためく人のをり



江島照美

雑炊のすつぽんに声弾みたる
初霜を耳で気がつく朝かな
鶏の迎ふる社冬日向
輓馬まで稚児乗せているおん祭
七草や米寿迎ふる父のみて

岡田桃子

寒雷の有無を言はせぬ一撃を
北風を自在に鳶の恋飛行
対角線描いたつもりの雪の杳
錆色に寒波及びびし紅椿
頭から猫の目指すは縞襦袍

久保夢女

不揃ひの黒豆どれもやはらかし
宝船猫も杓子も乗り合はす
歌留多取り忍ぶる恋も空に跳ね
春の闇深しチリチリ猫の鈴
お浄土は雪景色なり風も吹く

安野眞澄

蹲の水清らかに大旦那
お降りや大王松の青々と
気に入るもいらぬもありし福袋
東雲に湯浴み愉しむ二日かな
眠りたき綿虫山に消えにけり

山田佳子

抛入れの千両部屋の風変へる
松過ぎていつもの日々となりけり
本堂へ喘ぐ返道返り花
寒蜆御膳浜なる淡海かな
苔纏ふ五百羅漢や冬ぬくし

吉田順子

天日に色のぞきをり福寿草
山茶花の散りてなほます紅の色
立木みな個々の姿や冬の川
これよりのわが性しよ晴れよ龍の玉
日矢さして寒木瓜の紅ひかりをり

槐集

高橋将夫選

あつあつの米の功德や寒卵
枚方 阪倉 孝子

福笹の鯛も小判も千鳥足
寒椿消えゆくもの多かりき

鴝色の烏賊の腸ぬく雪女

寒紅や心はいつも旅路かる

解体の手の血を獵師草で拭く
大阪 有松 洋子

冬牡丹雨一滴にほどけ散る

雪女郎ルージュは真紅と決めてをり

流木に龍の爪跡冬の浜

惑星の深き眠りや霜の夜

古代には巨石文明雪達磨
江島 照美

おん祭カイロまで付く棧敷席

去年今年偕老といふ道目指し

寒声に聞き入る我はナルシスト

時代とはいとほしむ過去初日記

毛糸編む母の手許は子守唄
竹原 久保 夢女

肩揚げをつまみ春着となりけり
猫の髭ピンと正月祝ふなり

やはらかな餅やはらかな心かな

目覚めればほんにまばゆし雪浄土

若水の杓新しくなりにけり
寢屋川 前田美恵子

鬼の棲む岩屋に灯四日かな

一湾をひと舐めずりの春の潮

春の池命の塊蠢ける

力抜く筆の穂先や寒明くる

冬星を削除してゆくLED
摂津 中田 禎子

冬三日月塗腕一对出してをる

冬薔薇トシューズ持つ少女かな

臘梅やビスクドールの青深き

貝寄風や竜宮城の便りある

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』観賞

あつあつの米の功德や寒卵 阪倉 孝子
子供の頃から今にいたるまで、卵かけご飯は旨い。飽食の時代にあつてもお米への感謝を忘れてはならないと思う。

〈福笹の鯛も小判も千鳥足〉の句は、福笹の揺れている様子を巧に描いている。福笹の持主はさぞご満悦なのであろう。

〈鶉色の烏賊の腸ぬく雪女〉の句では、雪女の登場に意外性があつて面白い。不気味さがじわつと伝わってくる。

〈寒椿消えゆくもの多かりき〉と〈寒紅や心はいつも旅路なる〉は抒情的な句であるが、「寒椿と消えゆくもの」、「寒紅と心の旅路」がそれぞれよく照応していると思う。

解体の手の血を狐師草で拭く 有松 洋子

狐師が獲物を解体する場面。生きるための生業で、私達と無縁の世界ではない。手の血を草で拭くという行為に、自然と共に生きていることを実感する。

〈夕牡丹雨一滴にほどけ散る〉の句は、雨に散る冬牡丹を流麗に表現している。

〈流木に龍の爪跡冬の浜〉の句の「龍の爪跡」は何かで出来た大きな傷跡なのだろうが、一句に力強さを与えている。

〈惑星の深き眠りや霜の夜〉は霜の夜のやすらぎを大景で捉えた精神の風景。

古代には 巨石文明 雪達磨 江島 照美

古代文明は多くの巨大遺跡を残したが、モアイ像もその一例。

この巨石群に溶ければ消えてしまう雪達磨を取り合わせたところが味噌。それにしても、人は今も変わらず巨大なものを作り、遺したがるものだ。

〈おん祭カイロまで付く棧敷席〉の句によれば、棧敷席にはカイロまで付くぞうだ。着眼がいい。

〈寒声に聞き入る我はナルシスト〉は作者を聞いてさもあらな人と思わせる一句。

〈時代とはいとほしむ過去初日記〉の句、たしかに過去はいつになつてもいとおしい。

肩揚げをつまみ春着となりにけり 久保 夢女

「肩揚げをつまみ」で春日の中の愛らしい子供の着物姿が目につかぶ。春着の子を見るあたたかな眼差しがそこにある。

〈毛糸編む母の手許は子守唄〉の「母の手許は子守唄」や、〈猫の髭ピンと正月祝ふなり〉の「正月を祝う猫の髭」や、〈やはらかな餅やはらかな心かな〉の「やはらかな餅の心」や、〈目覚めればほんにまばゆし雪浄土〉の「ほんに、雪浄土」、いずれも作者ならではの着眼で、どの句からも作者のやさしさ、あたたかさ、遊び心が伝わってきて、読者の心をなごませる。

一湾をひと舐めずりの春の潮 前田美恵子

「ひと舐めずり」は言いすぎと思う読者がいるかもしれない。しかし、ここをそれらしい表現にしてみようと、作者の思いは何も伝わらない。俳句はもの言わぬ文芸とも言うが、言わなければ伝わらないこともある。

一方、〈若水の杓新しくなりにけり〉の句は、事実をさらりと述べただけだが、作者のはつらつとした思いが伝わってくる。

〈鬼の棲む岩屋に灯四日かな〉の句には奥行きがある。